

大学生のビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)3月13日(金)

京都市伏見区 渡部那菜 (19)

【ムーミン谷の彗星】

トーベ・ヤンソン作・絵 下村隆一訳(講談社)

私らしさを出してもいいんだ。そう思えたのはこの本を読んだからだ。

小さい頃からやりたいことや欲しいものが4人のきょうだいや友達と違ふことがよくあった私は、周りと良い関係を保つため感情を押し殺していたときがあった。

テレビで再放送されていたムーミンを好きになり、数冊あるムーミンのシリーズから初めて手に取ったのが『ムーミン谷の彗星』。この話は映画化もされていて大体の内容は知っていたが、原作にはアニメの明るいはのぼりとした感じとは違ふ、ムーミンの祖国フィンランドの白夜のように昼でも夜でもないムードがあった、独創的な世界観に驚かされた。

主人公、ムーミンとロールは彗星の衝突が目前に迫っていることを知り、世界の終わ

私らしさを見つけた最初の一冊

りが近いと騒がれる中で真相を知ろうと天文台を目指す。その途中で新しい仲間たちと出会い、共に旅をする。

臆病者のスニフや自由と孤独を愛するスナフキンや、仲間たちはそれぞれに強い個性があり、好みも違ふ。ネガティブな考えを持つ者もポジティブな考えも持つ者もいて、でも仲が悪いわけではなく、相反する考えが交わることで新たな発想が生まれる。

そもそもムーミン谷の仲間たちは姿形からしてまったく違ふ。キャラクターそれぞれの個性を確立させている物語として、私はこのシリーズを読んだ。そして、共に生きることで自分らしさの大切さを教えてくれた。

とりわけ最初の一冊は、私は私のままでいいのだと優しく諭してくれた。いうなれば「恩本」なのだ。

2020.3.13